

豫科練



No.473 令和4年

11・12月号

○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑》No.16…	2
○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》……………	3
○茨城の戦跡紹介……………	4
○パールハーバーに《君が代》が流れた……………	5
○三四三空隊史⑯……………	7
○さらば予科練⑦……………	10
○オーロラの墓標①……………	13
○雄翔館見学者感想文……………	20
○ホームページのレスポンス作業（スマホ対応）完了…	22
○海原会寄付者芳名簿……………	23
○事務局日誌……………	23

公益
財団法人

海原会

(〇六八三一一一五一四三七〇)

氏 照三 塚 口 泰

知 教 隊 西 市 山 山 庄 七 七 〇 二 一 一

● 西 庄 合 合 合

● 海 陸 海 陸 陸 陸 陸 陸 陸

● 陸 海 陸 陸 陸 陸 陸 陸 陸

● 陸 海 陸 陸 陸 陸 陸 陸 陸

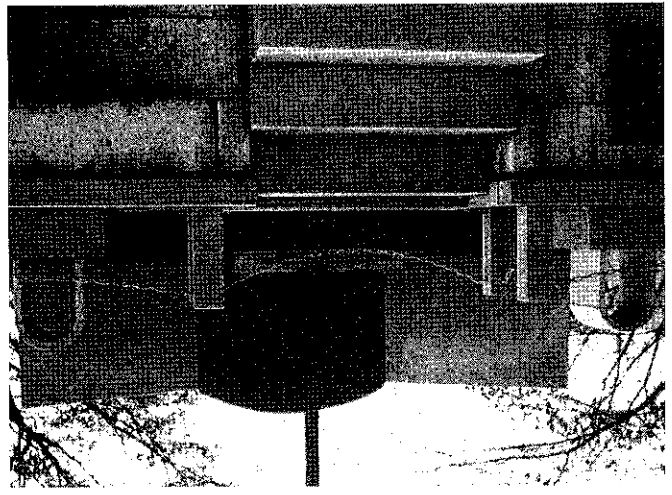
● 陸 海 陸 陸 陸 陸 陸 陸 陸

た。

て「陣」の遺魂の身身出練したた散華に
後、昭和四年四月十四日、海軍航空隊、
陸海軍航空隊、海軍航空隊、海軍航空隊、
海軍航空隊、海軍航空隊、海軍航空隊、

中核として苦烈な航空隊を闘った。
昭和十二年三月、海軍航空隊、海軍航空隊、
海軍航空隊、海軍航空隊、海軍航空隊、

の英才教育を行つて、海軍航空隊、海軍航空隊、
海軍航空隊、海軍航空隊、海軍航空隊、

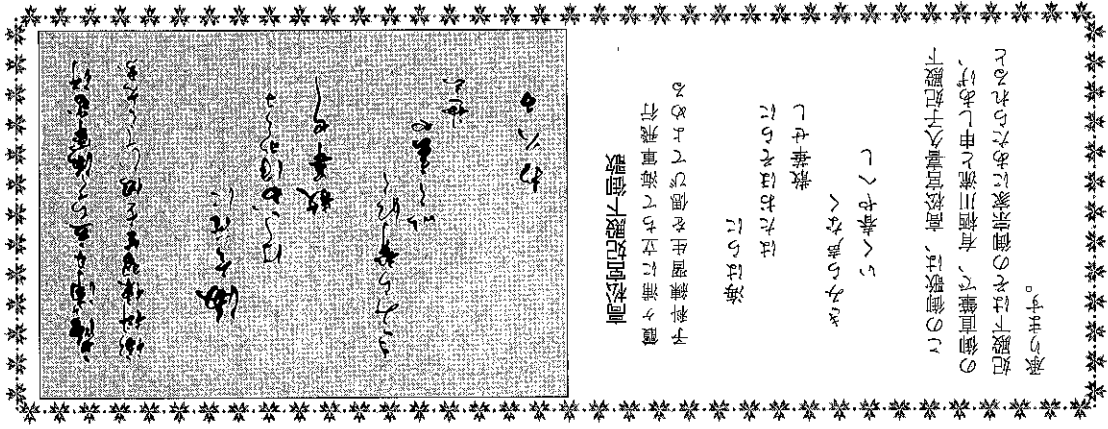


海軍及び予科練各種記念碑・慰霊碑 ああ予科練の碑 No.16

予科練の遺魂、
予科練の遺魂、
予科練の遺魂、

予科練の遺魂、
予科練の遺魂、
予科練の遺魂、

ああ予科練の碑
ああ予科練の碑
ああ予科練の碑
ああ予科練の碑



海軍飛行豫科練習生

遺書 遺詠 遺稿 并世

遺書

松田 光雄 少尉 (没後階級)

昭和二十年四月二十七日沖繩海域にて特攻戦死 (回天特別攻撃隊天武隊)
二十歳 甲飛十三期 茨城県出身

オ母サンへ

我侭シタリ、心配カケタリ、光雄ハ、オ母さんに何ト申シ上ゲテ良イカ ワカ
リマセン。シカシ今ノ松田光雄ハ、大日本海軍ノ松田トシテ、起チマシタ。

オ母サンノ子デス。

神州男児ノ華。

真ニヤリ甲斐アル男ラシイ仕事ヲ致シマス。

有難ウ、オ母サン、諸先輩、近所ノ方々。感謝感激ノ至リデアリマス。皆様、
オ元氣ニ。

に使われた施設で、コンクリート製で直径約三メートル、高さ約二メートルの円柱形で、中には数人が入れる空間があります。



【場所】茨城県銚田市汲上戦後、飛行学校や飛行場は山林・畑地・原野となりましたが、その一部には地元の人々のほか長野県出身の方々が入植され、長野県の「美ヶ原」にちなんで「美原」と名づけられ、開拓されました。

参考文献

- ◆ 学び・調べ・考えよう
茨城県の戦争遺跡 伊藤純郎 編
- ◆ 東京新聞 近代茨城の肖像
- ◆ 不死身の特攻兵 鴻上尚史

◆ 銚田陸軍飛行場と万朶隊 ◆

昭和一五	十二月、銚田陸軍飛行学校の設立 (浜松陸軍飛行学校内、翌一九四一年一月に茨城移転)
昭和一七	福島県相馬郡の原ノ町飛行場が移管され、銚田陸軍飛行学校分教室に
昭和一九	六月、銚田教導飛行団に改編 十月二十一日、特別攻撃隊を編成 (後日「万朶隊」と命名)
昭和二〇	十一月十二日、フイリピン・ニコラスで万朶隊長岩本益臣大尉戦死 七月、教導飛行師団第三教導飛行隊に改編 八月、終戦

安倍晋三
元内閣総理大臣を偲んで

「パールハーバーに
(君が代)が流れた」

海原会理事
平野陽一郎

今を去ること六年前の、平成二十八年十二月八日 開戦七十五年の時を経て、初めて日本国歌「君が代」が真珠湾の静かな入り江に流れた。



アリゾナメモリアルを望む追悼式典会場にて



この日、日本国ハワイ総領事及びアメリカ海軍共催の日

では、安倍氏の葬儀を「国葬」にするかしないかで国内を二分する議論になっている。

でも、そんな事はどちらでもいい。「国葬」だが「家族葬」であろうが、日本国民を代表して真珠湾に赴き、戦没者の魂に「一緒に日本に帰りますよ」と語りかけてくれたのは、戦後三十三年の総理大臣がいた中で、第九十七代内閣総理大臣安倍晋三氏その人であったことは、ゆるぎない事実である。私は、ただそれだけで満足であり、心から感謝している。

波静かな真珠湾に流れる日本国歌「君が代」が、十二年経った今も、私の心に甦ってくる。

安倍晋三氏の御霊

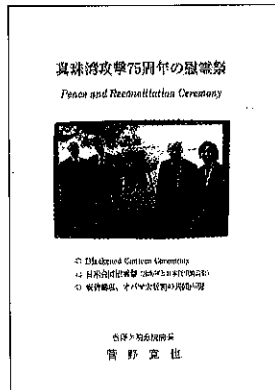
安らかなれと

お祈り申し上げます。

【お知らせ】

菅野元理事長がまとめられた、「真珠湾攻撃75周年の慰

霊祭」を、差し上げます。ご希望の方は、海原会事務局にご連絡ください。なくなり次第受付を締め切らせていただきます。(冊子の送付は着払いですので、ご了承ください。)



安倍元総理大臣のスピーチはこちらからご覧いただけます。
<https://youtu.be/7QxOw5lfKUw>

三四三空隊史 15

生命の尊さ

西野 利一 (工作)

昭和二十年の元旦は宮崎で迎え、腰掛程度で松山へ工作科だけの部隊移動があった。甲板下士のため忙がしかった。松山、ここが日本海軍最後のもので最強の紫電改の部隊になるうとは思ってもいなかった。当時は寄り合い世帯で佐鎮の兵隊もいたが、直ぐにどこかへ移動し入れ替りに私達の兵舎になったと思う。

一月中旬頃、「トヲトラトラ」で有名な源田実大佐が中央より三四三空司令として着任される。別名は源田サーカス。着任挨拶を庁舎前の号令台より、兵舎広場に我々全員が整列した中でなされた。

その日は降雪後で、新雪が朝日にキラメキ美しく、何ともいえぬ光景であり、また司

令の眼光の鋭さが今も忘れ得ない。

新品のピカピカの紫電改が鳴尾工場からぞくぞく空輸され、戦列に参加してくる。それが毎日毎日である。本土決戦を秘めた敵前においての物々しい戦備である。

南方より生残りの精鋭をあつめた三〇一、四〇七、七〇一の各飛行隊の猛訓練が始まる。正に月月火水木金だ。司令は猛将の源田大佐、一糸乱れぬ指揮振りである。

搭乗員は百三十名くらいいた。工作科も充実され、伊藤分隊長、山崎掌工作長、杉尾分隊長、甲斐分隊長、浅井金工部先任下士、里見、小坂井、赤尾、西中。木工部は旧来の嗟嘆先任下士、杉原、南兵曹と、宮崎からの旧隊に若い兵隊も多数来たので百二十名くらいになったと思う。

部隊名も剣部隊となる。立派な実習場(パート)があり、作業も大変多くなり活気に満ちてきた。

身を隠した。叫び「せいで」呼ぶ作業の影の間に
戻らした。私はハンマーをおおのび大馬で

掃射や即発信管の爆弾の両銃
掃化して修理中基地上空戦機場
攻撃してこる翼入、附近を修理し
て三月十九日、附近の救金部

酒の肴に花を咲かす
咲く花に花を咲かす
咲く花に花を咲かす
咲く花に花を咲かす

を「来襲」して、連絡
を「来襲」して、連絡
を「来襲」して、連絡
を「来襲」して、連絡

と移転が急がれた。
機を機に敵の襲来物の重さを
いませる敵の間の脚の重さを
いませる敵の間の脚の重さを



松山基地工作科信舎前にて

後日連令隊にた司合植草が懸く
機撃隊、我が方は植草が懸く
機撃隊、我が方は植草が懸く
機撃隊、我が方は植草が懸く

機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに

機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに

機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに

機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに

機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに

機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに

機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに
機撃の飛来を日を追って盛んに

私も見事なトスを一本製作、ホウの木で鞘を作ってもらって持っていた。

終戦で故郷に帰っても持っていたが父がどこかへ始末して行方不明で、今でもそのままである。

ある日リヤカーで若い兵隊三名と食事取りに行く途中、機銃掃射(シコルスキー)に会う。山の彼方に黒い機体を見つけたので逸早く真横の小川へ。『空襲だ我に続け』と一体となつて飛び込んだ。

間一髪で命拾い。すぐ様人が渡る石畳のような橋の下へ避難した。が人影を見た敵機はうるさく何回でも旋回して攻撃して来る。

静かになつてあがつて見ると機銃の穴が無数に何条もあり、五十米くらいのところを男子作業員風の者が背中と肩をやられて血を流しながら草叢の方へ逃げて行くのを見た。

私も三名の若い隊員を指揮して、無事総員の食事を持ち

帰った事を思い出す。

一週間ほどして松山市内が焼夷弾や爆弾で追後温泉附近だけを残し灰燼となつた。

一方我が三四三空の紫電改はどうなっているのかと思ひ込むことが多くなり、心配が増してきた。

小学生時代に『若し日米戦わば』といった勇ましい本が出廻っていた。八八艦隊がどうの、昭和遊撃隊がどうのと、これが本当になつてしまつて山本五十六元帥が開戦反対。

敵の煙突の数を数えよ。二十年くらい待て、もし開戦になればホワイトハウスに日章旗を立てるといわれ、我に陸軍兵二十万を貸せ、十万人をハワイへ上陸、十万人でパナマ運河を破壊占領する、といったかいわぬか知らぬが、元帥の作戦通りであれば、事態は変わっていたかもしれぬ。ABC D包囲網さえなければ戦争はしていなかつたと私は思う。

戦争を知らぬ子供達へ平和

の尊さ、また何のために戦争をしたのか、歴史の一コマとしての戦争をよくわかつてもらいたい。

我々が三四三空で得た誇りと、家族主義の背中を流し合う精神と、父母を大切にすることに重点を置いたこの尊い主義とを子供達に申し送りたく思う。

戦後経済大国にはなつたが、赤い国より国土を守る国防だけは忘れてはならぬ。それには有事立法が必要である。

力のある者は力を、金のある者は金を、頭のある者は頭を、日本人同士が目覚めねばならぬ。現在あまりにも自己主義が多い。

祝日には日の丸の旗を堂々と立てよう。

(追記)

現在毎年工作科主力の剣会を開催し、第十七回も無事終了した。会長は杉尾分隊長、名誉会長は源田実司令である。

うなぎやの

マーちゃん

横井 友数 (工作)

捷一号作戦とは何なのか。我々下士官兵にはまるで分かっていないが、何時か戦局の挽回を信じてひたすら分隊の任務完遂にこれに努めた。

松山城の樹木も、お堀の浮草も、春を迎えてほころびる頃外出して娑婆の風にあたり、馬鹿酒を呑み、馬鹿声で軍歌を唄い気持ちをやわらげるのを一番楽しみにしていた。当時松山市内に海軍指定食堂として『亀屋』、『コマドリ』、『うなぎや』等があつたと記憶する。各分隊ごとまた各自夫々に行きつけの店があつたようである。私達工作科は主に『うなぎや』が多かつた。外出時にビール券が一枚宛売り出されていたが、食堂へは数枚持つて来る者が多かつた。私も外出前には必ず先任伍長室へ

十四歳から十八歳の少年達は、海軍というから海か湖のあるところを考えていたのに、山の奥深い航空隊に哑然としながらも、行けども行けどもなだらかな上り坂にうんざりした頃、漸く平坦な道になり飛行場、更にその奥の隊門をくぐり、第一期乙飛行機整備練習生（七五〇名、以下第二）第八期まで毎月ほぼ同数が入隊し計六二〇〇名）の誕生である。

この「整備練習生」と言う称号にも多くの人が疑問を持ったのではないだろうか。（すでに十九年四月一日、やはり整備練習生として申良空へ約一三〇〇名入隊、同隊へは七月、八月、九月、十二月も入隊）また、兵器整備（光学・写真・射撃）練習生として洲の崎空へ六月二〇〇〇名、七月第二鹿屋計二四〇〇名、他に十月岡崎空、十一月第二岡崎空へ整備練習生として甲飛が入隊する等複雑多様を極めた。そしてこの人たちは別に十九年六月三重、鹿児島に乙二十二期生が約三六〇〇名、

更に八月一日二十三期生が兩隊に四六五四名入隊、十二月一日二十四期生八〇〇〇名が三航空隊に入隊、同期はその後も六月まで毎月続き計四五〇〇〇名に達する。

（便宜上私はこの人達を本科生と呼ぶ）

昭和十九年春、すでに中央では特攻兵器の採用・生産に乗り出し、今や戦局の推移は敗戦への道をひた走る様相を呈してきたのである。

最早、通常の組織と運用では難局に対処することはできない。特に相繼ぐベテラン搭乗員の消耗の、その対策の一環として昭和十八年四月従来丙飛に変わり、然も速成を目標に特乙制度が大量に導入された。

この特乙制度は乙飛志願者のうち比較的年齢が高く、然も心身とも優秀な若者を採用し、そして結果的に大きな成果を収めたと聞く。当局はこれによって更に乙飛志願者の中から（勝手に）飛行機整備兵器整備の練習生を選抜し、一般の乙飛・本科生とは別に

然も速成教育を施し、第一線に送りだそうとしたのである。従つてこの選抜された練習生は優秀で遅しく、素晴らしい若者ばかりである。

私は終戦間近、四月に奈良空入隊の練習生を受け持ったが、あまりにもやわで可愛いのにビックリした。最も三年前の私もそうだったのかもしれない。そこへいくと、これは戦後だが、人吉空の薄衣さん、洲の空の小林さん等にお会いしたが立派なのにビックリ（又々）した。

人吉空の練習生は、海軍軍人としての基礎教育と併せて、飛行機の知識を習得するため整備教育をし、卒業後操縦・偵察に分かれて搭乗員養成の教育を実施することになっていったという。

然し、これらはすべて画餅に帰し、若干、卒業後実施部隊で、搭整、そして他の光学・無線・射撃練習生も飛行機搭乗のチャンスがあったかのようになっているが、戦局の急落は若者の夢を無惨にも砕いたのだ。

五期生として入隊した薄衣さんは次のような手記を残している。

決戦の大空へ

昭和十八年、戦いもいよいよ激しく、連日、ラジオからは勇壮な軍艦マーチが流れていたが、然し、最近、転進とか玉砕と言う耳慣れない言葉も報道され、少年の身にも緒戦と違って熾烈で容易でないことだけは感じられ、何だかジツとしていられない気持ちであった。

そして連日、海の荒鷲の華々しい活躍が伝えられ、決戦の主役は空である。日本男児と生まれたこの身をいかに役立たせるか、私は密かに大空へと心に誓っていた。巷に海軍志願兵・少年飛行兵募集のポスターが貼り出された。私は早速両親・兄達に希望を述べたが、兄と母が最初に反対した。呉で爆沈する少し前まで陸奥乗組員であった兄は、華々しさの陰に飛行兵の消耗品的存在を知っていたのであ

八月九日、ソ連軍の進攻、十五日終戦と、一転不安定な立場に突き落とされ、結局、ソ連軍の口車に乗せられ、長い辛い汽車の旅の果て、モスクワ郊外の収容所での過酷な生活を強いられたのである。

そして二度目の冬が過ぎ、春を迎え夏の終わりに漸く長い抑留生活にピリオドをうち、実に三年三か月、十五歳から十九歳までの青春時代を忍従と、屈辱にまみれた氏は、それでも帰れたから良いと達観しておられる。なお、薄衣氏と同期の山本茂雄氏は、かつて私が発行した

「雄飛の記録」に、岩井秀夫上等飛行兵」という感動の一文を載せさせて頂いている。

本科生が予科練のメッカ三重空（同じくメッカ土空は十九年三月甲飛専用となった。私たち十九期が退隊の時「これで十八期が卒業してしまえば、もう、予科練の伝統は消えてしまう」と、某分隊長は嘆いた。）や、奈良、鹿児島空でぬくぬくと（一寸失礼か

な、やがては特攻や、警備隊となるのに）訓練生活を続けている最中、人吉空卒業生たちは（他の速成教育隊も同様）最前線の過激な砲煙るつぼの中で生きていたのである。

故にこそ、いま、高原の一角に「人吉海軍航空隊之碑」の巨石が立ち、人吉市城址公園内に「予科練留魂之碑」が立つ所以である。

この拙文は五期生杉本義一氏が元分隊長本田寿男氏の手記を一読、その貴重な文献性と、予科練生に対する温情に感激、更に元分隊長、練習生等の玉稿をまとめ出版された体裁・内容共素晴らしい「高原の予科練」誌より抜粋、または参考とさせて頂いたが、関係者に心から感謝し、併せて他に引用した各種資料についてもお礼申し上げる次第です。

本田元分隊長は同書の始めに次の如く述べられた。「海軍航空戦力の中核を担った予科練も、悲しい運命を辿る悲劇の主人公ともなったが、その精神は今尚力強く日本の国の

支えとなっていると断言できる」と。

ありがたいお言葉である。

ここ人吉市は明治十年、西南の役で田原坂の決戦に敗戦した、西郷隆盛率いる薩軍が態勢挽回の陣を引いたが、怒濤のように押し寄せる政府軍の為、衆寡敵せず六月一日、南方に敗走した地である。

今、高原に秋風吹き、芒の穂波のうねりは、かつてここに励んだ純白の軍服の予科練の幻にも似て、思わず想起する不確かな古詩一節は、病葉浮かぶ川辺川のせせらぎに和して独吟の、

風蕭々として易水寒く
壮士一度去つてまた還らず
嗚呼



人吉海軍航空隊之碑

熊本県球磨郡錦町宇高原

この記事は、海原会懸賞文に応募された作品です。（事務局）

オーロラの墓標

乙飛十七期

神馬 文男

ロシア兵の撃った「バリッバリッ」という銃声が目が覚めた。ネボケまなこの私は、糊づけされたような体を急に持上げることができなかつた。

夜通し続いた強制荷役作業の疲れが、まだ体に残っているのだ。

顔、首など肌の露出部は勿論のこと、肩や背なども荷揚の擦過傷で、皮膚が格子縞模様にくれあがっている。触るとヒリヒリする。まだ固まりきらない血が、みみずのように腕にへばりついている。わらじ虫のような血豆が指先にくっついていく。体全体がずきずき痛む。

私は埃と涙と汗で、縞馬のようになつている顔を持ち上げた。

私たち五人の搭乗員（熊倉乙18・吉田甲12・松永甲12・A

人員を点呼するのだが、なかなか数えあげることができない。

軍服の胸ボタンは外れ、帽子は天井を向き、これでも軍人かと思われる姿態のロシア兵だ。

途中まで数えていって、わからなくなると立ちどまって、帽子のつばを右指で突き上げ、唾をチュツと吐き出す。そしてまたやりなおす。

初めのうちは、ふざけて何回もやりなおしていると思った。人数については、これだけ厳しいのだと思わせる為のものとも思った。だが、本当に数えられないことがわかった(ロシア兵の多くは、数には弱かった)。

とうとう終いには怒り出して、私達を五列に並べ、右手を列の中ほどまでに差し込んで、五十、十五というように数えていった。

数には弱かったロシア兵も、射撃となると文句なしに上手だった。缶詰の空缶などを無造作に木の枝にぶら下げて、だれでもこれを難なく撃ちおとした。

銃も、いつでも気が向いたらパンパン撃っているようであつ

たから、そのような環境が射撃名人にしているのかもしれない。

盛土され、排水溝が掘られ、比較的土地がかたくなっている所に、半地下式の幕舎が二十棟ほど建っていた。その周りには、背丈の二倍くらいの高さが、一間間隔位に立てられ、それに有刺鉄線が十五センチ中くらいに、びっしりと張られていた。

有刺鉄線の柵は、二重になっていた。また更に柵の内側一間くらいの高さに、約五十センチの高さで針金一本が張めぐらされていた。この線には、電流が通してあるとか、ないとか言っていたが、真偽のほどはわからなかった。

所要所には望楼がたてられ、そこには着剣したロシア兵が昼夜を問わず嚴重な見張りをして

いた。

とにかく、これから先何年お世話になるかも知れない収容所

だったのである。

ロシア兵が私達を宿舎となる幕舎まで連れて行った。すぐにも入り込んで横になりたかつ

たが、その前に、この所長ともいうマイオール(少佐)から話があった。

きつと入所についての注意事項なのだろうが、通訳なしのロシア語は私達には、さっぱり解らなかつた。

私達は、マイオールに監視のロシア兵が、ここに来る迄の間を、万年筆その他を強奪したことを、身ぶり手ぶりで訴えた。

赤ら顔で鷲つ鼻長身のマイオールは、大きくうなずいてロシア兵に何か叫んだ。

六人のロシア兵は私たちの前に並んだ。

マイオールは兵隊を指さし、

私たちに向かってクトー(誰)と言った。つまり誰が盗つたのだということだ。首実検で犯人をあげるということだ。

私達は、どのロシア兵がどれだけ盗つたのかは知っていたが、後難を恐れて、誰も何も言わなかつた。「クトー」を二、三回繰り返しただけで首実検は終わった。

マイオールとロシア兵は、ほ

つとした表情をした。

私は門から三つ目の幕舎に落ち着くことになった。いつまで此処に住むことになるのだろうか。涙がこぼれそうになったので空を見上げた。

私が今此処に来ていることは、日本にいる誰も知らないだろう。若し、知っているとしても、無事に羅津か舞鶴航空隊まで飛んだ先輩同僚だが、墜落した私と熊倉一飛曹を戦死扱いにして

いるだろう。

吉田一飛曹他二名の搭乗員がなぜ元山航空隊に残っていたのか、私には疑問だが、航空隊がソ連に接収されたことから彼等は抑留されたという推測はなされるであろう。

私と熊倉兵曹は、これからシベリアでのたれ死んだとしても、異国の片隅で起きた小さな出来事として、名前はおろか員数として処理されるだけだ。

籍だつてもう日本にはないかもしれない。自分なんて、本当にちっぽけな存在になつてしまつた。

だ十代の少年だが陸軍で言えば曹長、軍曹クラスである。だから、そのようなことで気を遣うようなことはなかったが、月日が経つうちに日本兵の階級制度はだんだん崩れていった。

さて「めしあげー」のことだが、慣れは恐ろしいもので、あのやぼったいと思つた言葉もだんだんと魅力のあるものに変わつていった。そして待ち遠しいものとなつた。

炊事場で、その係がその合図を声高に叫ぶと、わずかの間に次から次へと口伝えで、収容所全部の幕舎に伝達される。そうすると間もなく、当番が醤油樽いっぱいこのうりゃん粥をタポタポ音を立てさせながら運んでくる。これが私達の命の綱である。シベリアの重労働は、この粒さえ見えない粥によつてなされたのである。

粥は運ばれてくる途中で、あまりのひもじさから当番によつてつまみ食いされたり、待ち伏せしている者に襲われてりして、幕舎につくまでは危険がいっぱ

いである。

とにかく無事に運ばれてくると、それを衆人の見守る中で、四人に一個の割で出した飯盒に平等に分配する。樽から取り出し、配る時がまた問題である。先になるか後になるかで粥の密度が違つてくるからだ。

公平に分配するためには、よくかき混ぜてから右から左に、左から右にとりたように注いでいかなければならない。

衣食が足りている時とか、人にはこのようなことは考えもしないことであるが、人間極度に空腹になれば、麦の一粒、粟の一粒でも多くとりたくなるものである。

ときに、芋などが樽の底に沈んでいることがある。こんな時は大変である。人数だけあればよいが、そのようなことはまづない。目方をはかつてグループ別に分けるか、樽の中ですりつぶしてしまうしかない。

飯盒一本が四人分の一食になる。これだけでは到底私達の腹を満たすには十分ではなかった。

もし食糧が十分に与えられていたならば、あれほど多くの日本人は死ななかつただろう。またソ連に対する悪感情もさほどではなかつただろうし、ソ連の仕事もはかどつていたかもしれない。

こうりゃんの外に、米、麦、粟などもあつたが、何れも病人の流動食のようなものであつた。昼食はたいていの場合黒パンであつた。あの酸っぱい味のする黒パンである。いつも空腹だつた私達は、好き嫌いを言つていられなかつた。すぐに慣れた。この黒パンの分配も大変面倒なものであつた。同じ大きさに切つても、網目状の柔らかい部分と、両サイドの固い部分では目方も違うし、質も異なつていた。だからどの部分が自分に当たるかが問題であつた。また、パンを切つた時に出るくず粉の処分にも強い関心を持つた。

この昼食用の黒パンは、朝に配給されるのが常だつた。誰も昼まで持つてゐることはなかつた。

朝に昼食用の黒パンを食べてしまつた私は昼にどうしただろうか。誰もがしたように野草を採つて飢えをしのいだのだ。生で食べられるものは生で食べ、煮なければ食べられないものは煮て食べた。

口は馬が草を食べている時のように、緑のあぶくでいっぱいになつた。出る便は、多くの場合柔らかい緑を帯びてベトベトしてゐた。野草のほかに、捕らえることのできる生き物は殆ど食べた。いずれも味付けなしの自然そのままである。

ただ、時に少量の岩塩を手にするのができた。これは宝物となつた。唯一の調味料である。あまり塩分をとり過ぎると、栄養失調の時と同じく顔がむくんでくる。ちよつと見ただけでは、栄養がよくて太つてゐるのか、その逆なのかわからない。

ある時、私は空腹を満たすために松の実を食べた。シベリアの松の実は大きかつた。私達はこれをパイナップルと称してゐた。食べるごとに腹がふくらみ

幕舎に残っているのは病人だけである。彼等は死体運送人となって、夕方みんなが帰ってくるまでに、死体を空幕舎になった死体置き場まで運んでいく。

病人が死体を運んでいく様は実に哀れである。栄養失調で幾分小太り気味になっている死体は、骨と皮だけの病人の言うことを聞いてくれない。腕を持ち足を持ちして、引きずるように運んでいく。病人はボツクイを立てたように細った足に力を入れる。何かのはずみでけつまづくと、そのまま死人の上にかぶさってしまふ。ようやくのこと死体置き場につく。

寒い日が続くときは、先客が幾体も枕を並べて横たわっている。人の住まない幕舎は一層冷え冷えとして寒気が肌を刺す。

空いているところに死体を置き、隣の粉雪を払うと、すでに硬直した別の顔が出てきた。そそくさと幕舎を出る。振り向くと、青白い顔が恨めしそうにこちらを向いている。運んだ時死体に触れた手や外套を雪でこす

り、死神を払い落とす。

死体置き場に時々明かりがついていることがある。ハツパ線をローソク代わりに使っている時だ。これは炭鋳作業に行っている仲間が、こっそり拾ってきた使い古しの細い銅線である。被覆部分に火をつけると燃える。ローソクほどではないが、少しは明るくなる。それを灯明代わりにしているのだ。幾時間もつという代物ではないが、絶えないように順繰り使えば結構役立つ。燃え尽きたらまた、元の闇に戻ってしまう。そんな時は、ひとしお闇を感じるから死顔の残象が眼底に残り、空恐ろしさを感じる。

死体を運んだ病人たちは幕舎に戻り遺品を整理する。遺品というに聞こえはよいが、実は何もないのだ。使っていた毛布を本部に返品するくらいのものである。宝物としていた缶詰の空き缶と木を削って作った匙は、遺族に渡すこともできないので処分をしよう。病人たちは、やがてめぐって来る死を考えな

がら沈痛な気持ちになり、薄暗い幕舎で横になる。

シベリアの夜はすぐにやってくる。

仲間達がノルマを終えて、ヘトヘトになって帰ってくる。多くは物も言わないで自分の寝床に行き、朽木が倒れるようにドタツと横になってしまう。みんなの食事も終わり一休みしたところで、死体置き場で通夜兼告別式が始まる。これも名ばかりで出席者はほとんどいない。出席者より遺体の数が多いことさえある。僧侶の説経も寒さのため滞りがちであるが、これを聞くとなぜかほっとする。これらの遺体は、明朝作業に出ない病人たちの手によって、収容所近くの斜面にある墓地に埋葬されることになる。

シベリアの夜が更けて凍った空気が幕舎に重くのしかかる頃、死体置き場で恥ずべき事件が起きる。星明りに青白く浮かぶ死人の顔に、黒い人影が這うように近づくと、貴金屬類など身に付けている物があればそれを盗る

のだ。またそれだけでなく、衣服をはぎ取り靴を脱がす。シャツから下着まで使用できるものは全部はがし盗ってしまう。恐ろしい光景が次から次へと続く。後に残るのは丸裸の死体だけである。後日作業場で、死人の所持品を身に付けていたロシア兵を見たことがある。

冷え切った屍は、シベリアの寒気を一晚中受けて冷凍庫の魚のように凍ってしまう。

またある夏の昼の出来事だったが、何気なく通った空幕舎の窓で、人間が人間を切っている図を見て慄然としたことがある。それはこうである。幕舎の窓辺に日本人の死体が一体置かれてあった。その死体は急造したと思われる板敷きの台の上に乗せられていた。小柄で垢で汚れている死体は、全裸で胸から腹まで切開されていた。これを見ただけで私はすっかり血の気を失った。死体を置いた台の周りに三人の人が立っていた。一人は背丈が大きく頑丈そうな体躯の持ち主で、顔には白く大きなマ

まず初めに胸がしめつけられる思いです。自分よりもずっと若い方達がお国のため大切な人のためと、それぞれ心に秘めた迷いなどもあったとは思いますが、それを言わずに戦地へ向かわれたこと、そのおかげでみなさんのお命のおかげで、今自分がこうして生きることができていること。感謝の一言ではとても言い表せません。何もできませんが、命をはって日本を守って守って下さった皆様を忘れずに、ただ、ただ、感謝して、今日も明日も一生懸命に生きていきたいと思えます。

令和四年六月

稲敷市 宮本様

熊本から戸籍上に残された大叔父（祖父の弟）のことについて調べていたところ阿見町にある雄翔館にたどりつくことができました。予科練を経て硫黄島にて戦死された（とされる）大叔父の遺影やパネルなど、想像もしていな

かった大きな手掛かりを見つけることができ、大変感動いたしました。

これまで大叔父の遺品などを大切に保管して下さっていたご家族方、海原会関係者の皆様に深く御礼申し上げます。

このきつかけを機にさらに大叔父のことについて調べ、命の尊さ、平和な生活を送ることができることへの感謝の気持ちを肝に持ち続けていきたいと思えます。

令和四年六月

熊本市 徳永様

2回目の来館です。八月にしか平和に思いを寄せない愚か者です。

ロシアのウクライナ侵攻という戦争が行われている今私達国民は昭和という時代に命を懸けて戦場に散っていった（いかなければならなかった）多くの若者・英霊を思い出し平和の大切さ、今を生きていることのできることへの感謝をもっと真剣に享受すべきかと思

いました。ここに来て涙で心の洗濯をして日々を生きて行ければ何て意味のあることだろうと思えます。

令和四年六月 大崎様

太平洋せんそうにはこんなかなしいことがあったのが知りました。

せんとうゼロせんや桜花や回天いろいろなせんとうきやせんすいかんが、あるのを知りました。

令和四年六月

（住所、おなまえ記入なし）

「日本はいい国だ」過去にそういつて解任された航空幕僚長がいた。今では誰の目をはばかることなくそう言えるがそういつてはいけない。愛国心などもつてのほか。わが国にはそういう風潮があった時があった。私は子供のころから「なんで日本人が日本を愛していけないのだろう」を疑問でしかなかった。

近年ではウクライナ戦争などで日本人も国防を意識する

ことも多くなり自衛官らに対する敬意や期待が高まっているが、その彼らですら堂々と身分を明かすことができなかつた。そんな時代にも予科練を誇りに思いその記録を大事にしてきた方々がいる。私はその人々も感謝されるべきだし尊敬されるべきだと思う。

令和四年六月

石岡市 島田様

本日、同期生の友と二人できました。死ぬ前に一度は見えたかったので大安心しました。皆様のてがみを読んでなみだが出ました。良くぞみんなやってくれました。――
今の平和があるのは、みな様のおかげです。―― ありがとう――

令和四年六月

札幌市 高橋様

只々涙が止まりません。有難度う御座居ます。

令和四年六月

旭川市 中川様

URLから是非アクセスしてみてください。

(公財)海原会寄付者芳名簿
(敬称略) (単位不同)

令和四年八月二日より

- 二里 泰彦(甲15)東京
- 五 岩井 四朗 千葉非会員
- 五 若月 良介(一般)静岡
- 五 松本 美保 茨城非会員
- 五 若泉 進 茨城非会員
- 五 山口 久雄(乙24)神奈川
- 五 高橋 二郎(乙20)神奈川
- 一〇 川岸 義規(乙19)北海道
- 五 田代 芳広(一般)東京
- 五 酒井 陽太(一般)東京
- 五 松浦 健三(甲14)栃木
- 五 岡本 正人(乙22)埼玉
- 五 磯部 恭子(一般)静岡
- 五 宮下 久代(乙8遺)埼玉
- 二〇 今井アサ子(乙18遺)群馬
- 五 藤野 つね(一般)埼玉
- 一〇 岡井 陽八(甲13)奈良
- 五 成毛 勝義(乙20遺)千葉
- 二〇 磯貝 孝子(一般)神奈川
- 五 服部 義隆(甲16)神奈川
- 一〇 竹前 正一(乙17)長野

- 五 平賀 義治(甲13)神奈川
- 五 大久保浩之(甲14)佐賀
- 五 三浦 昇(乙21)三重
- 五 山岸 修次(乙18遺)栃木
- 八〇 吉田 昌子(甲12遺)千葉
- 五 猪俣 武薄(乙6遺)茨城
- 五 国広 敏夫(乙22)兵庫
- 五 松浦 定(乙18)愛知
- 五 光谷富美子(甲5遺)石川

海原会へのご芳志
誠に有難うございました。



事務局日誌

八月五日

一橋大学院生資料収集来所
於 事務局
一橋大学院生が、論文作成に資する資料収集のために来所

十一日〜十七日

夏季休暇のため事務局閉鎖
二十日

八月定例理事会

於 事務局
安井理事長、酒井・星指副理事長、平野理事、篠田理事、山下理事、湯原理事、行方参与が出席
保坂理事はテレビ会議システムで出席
暑氣払い

二十九日

予科練平和記念館運営協議会
於 予科練平和記念館
運営協議会委員に指名され

九月五日
ている、平野理事が出席
三者連絡会
於 事務局

阿見町に所在する、慰霊関連団体で意見交換を行った。
参加者 安井理事長、平野理事、予科練平和記念館長、同豊崎学芸員、阿見松観光ガイド安部会長、門馬副会長、海野議員、阿見町生涯学習課長他一名

七日

日本文化大学教授 川邊雄大氏来局
於 事務局
研究資料の収集のために来所

十九日

丙飛十二期境田忠信様の妹高山智恵子様他三名来所
於 事務局&雄翔館
平野理事、行方参与、工藤会員の三名で雄翔館を案内した。

